Coordinator

コーディネイター

THE HENTAI DOJINSHI

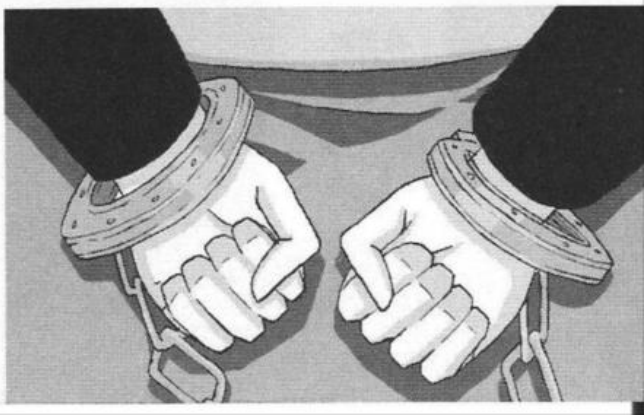
18禁

機動戦士ガンダム SEED DESTINY

葦牙の如く
萌え騰る物に
因りてなれる
オタ御魂
ビバ！
エロ同人誌
名児屋 達見 謹製
Coordinator

「ど、何処？ここはど…ハッ !!
連合…ね。くっ、このアタシが捕虜
になるだなンてェ～～～」
「くくっ…お目覚めかい？赤服たん」
「きゃっ !?あンたドコ触ってンのよ
ぉっ！あ、いや、やめなさいッ !!」
「オイ × 2、捕虜の分際で命令か？
チミ　立場ってもん分かってンのか
ね？日本語分かってンのかね？」

「ハア？あンた　アタマ大丈夫？
なンでアタシがそんなアキバ系民族の言語
なンて理解できなきゃなンないのよ。
そんなもの知ったところで、１ペソにもな
らないわ」
「チッ。このメスブタ　軍学校での教育が行
き届いてねえ。
栗東にでも送ってカイバ喰わせねえとダメ
か？静内にでも送って種付けしねえとダメ
か？」
「うっ……（なによコイツ。ニ○サンのＣＭ
に出て調子に乗ってる庵○並みにイカレて
ンじゃないの？）」
「ほほう…。お前　今　庵○ばりに電波ばし
ってるとか思ったね。思ったね。
いけないなァ、英国のヘ○リー王子より紳
士な俺でもちょっちキレちゃうよ？
元少年Ａ（22）よりキレちゃうよ？」



「あっそー、キレればあ。あンたたちナチュラルがキレたところで、アタシたちコーディネイターにキズひとつ付けられないンだからッ」
「……言うたなあ、このアマ生意気にもキラ・ヤマトみてぇなこと言いおったなあ。
前作の亡霊……尻軽アイドルや、駄目っ娘政治家どもの後塵を拝するサンピンごときがぁ～～～っ!!」
ぐにっ、ぐにににっ
「……っくっ!!ふふっ、その程度？その程度で胸もんでるつもりぃ？そんなンじゃ、ザフトのセクハラ教官に遠く及ばないわね。
アブなんとかでも買って、出直してらっしゃい」
「ったく、コーディネーターってのは淫乱だよな。こンだけお触りしても、まだ欲しいとか言いやがる」
「だ、誰が欲しいだなンて……」

がばぁっ！
「ほうら、ここの突起はこんなにも欲しがってンじゃねえか」
「やんっ。見たわね、隊長にもパフ×２したことないのにぃ」
「ふん。お前　今時　パフ×２かよ。最近の３歳児なンてパフ×２くらいじゃエレクトしないぜえ。
大体、お前　そんなこと言ってっから、こうやって捕まってンだ。
言行には気ィつけろー」
「えっ!?それって……」

ちゅっ、ちゅうぅぅぅ……
「あ、あ、いやあ……。なんでエ、ねぇ、なんであたしが捕まったの？どうして捕まらなきゃいけなかったのォ？ねぇ、ねぇぇぇ、教えて！教えて、お願いッ!!」
「あん？教えて欲しいンか？……そうか、まあ、冥土の土産に教えたる。
実はジブリール様の義妹（小３でカリスマＪ○ＮＥ作家。将来の夢「お義兄ちゃんのお嫁さん」）がアスランと×（かける）のはキラ以外ありえねえとか言ってジブリール様を困らせるのよ。
だから、俺にこうして悪い虫を排除するよう詔勅が下ったのさあ。
別に俺が赤髪好きなワケでも、M字ビ○ーン食らったワケでもねぇンだぞ。その辺り勘違いすンなー」
「…な、なによそれ。あたしそんな下らない理由で犯られてンの？
英検３級落とすような野糞に掘られようとしてンの？」

「ああ、そうだ。よく今の状況を理解したな。
というワケだから、暴れないで大人しくヤラレとけ。
どうせ頑張ったところで、オリハルコン製の手錠壊せるわけねぇンだしよ」
「……うぐぅ（どうせなら、諏○部ヴォイスのシャブ中兄サンにしてくれれば良かったのにぃ）」
「残念だったな。作者が若い兄サン描くのが嫌いで……。
くくっ、正直、同情するぜぇ、ルナたん」

「さあ～って、ルナたん。事情を理解したところで脱ぎ×２しましょ～ね～……っと」
びらりん☆
「あっれ～～、ルナたんのおシモにエロ汁はっけ～～ん。まさか発情？無能なナチュラル相手に発情ぉ？」
「ば、ばか。それは冷や汗よ。そんなもの見れば分かるじゃないのぉ」
「はいはい。それにしてもいけない娘だなぁ、お前。俺みたいなアキバ系に発情してるようじゃあ、田舎のお袋さんが自殺サイトのお友達とオフ会しちまうぜ」

「か～っ、親は関係ないでしょ、親は。あンたがウチのお母さんの話すると、お母さんが穢れる。抹茶入りのジ○イでも落ちないくらい穢れる」
「おいおい、他人のことをゴキブリみてェに言うなや。お前のおぱんつのほうがずっと汚れてるじゃねェの。
そんなふうに根拠のない言いがかりをつける悪い娘には制裁措置が必要だな。
ってわけで、おぱんつ没収～～～」
「うわっ、ひどい。あたしのおぱんつで変○仮面になる気ね、あンたっ」
「ハア？お前、発想が貧弱だな。これだからパンピーは嫌いなンだ。これは我が家の家計の足しとして銭○警部とピ○ポくんが守るサ○ビーズで競売に出されるンだよ。オタクな石油王のコレクションになるンだよ」
「…あっそう。もういいわよ。もうどうでも……」

「そうか、そうか。じゃあ、遠慮なく頂いておこう。あとで、ビ○グサイト東の１２３のトイレで一回使っておこう」
ずるっ、ずるずるずるっ…
「ひゃあっ、屈辱だわ。胸に続いておマ○コまでも…」
「さてさて、俺も遊んでないで、ちゃんとオシゴトしねェとな。来週のサ○プロで田○サンに叩かれちまうよ。
ってか、真面目にお前をいたぶらねぇと、ボーナスもらえねェ」
「き～～～っ、たかが公務員のボーナスのために初めてを奪われるだなンてェ。
…あたしかわいそう。下っ端動画家さんよりかわいそう」

「ぶわっかもん。動画家様がかわいそうとは何たる侮辱…。お前には彼らのムネにたぎる情熱が、愛が見えぬのかッ！本当にかわいそうなヤツだ、お前は」
「くっ…、本当にそう思うンなら、こんなことやめなさいよぉ」
「ふん、やめられるわけがなかろう。俺はボーナスで『劇場版Ａ○Ｒ』を手に入れねばならぬのだ!!」

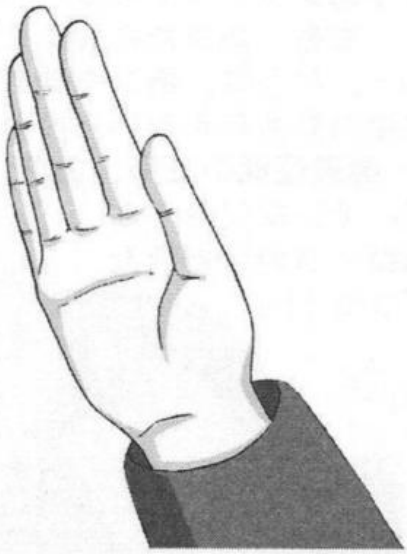
「よ、よりによって、『劇場版A○R』!?
京○アニメーションの名を九天に轟かせたTV版ならまだしも、あたしを犯る理由が『劇場版A○R』……？」
「うるせえなあ、俺がテレカ付のエロゲー買おうが、本人は表紙＋2，3ページしか描いてない外周サークルの同人誌買おうが、俺の勝手じゃねえか。
お前、アスカみてえにピーピーぬかさねェで、レイみてェにマグロキメこんでりゃいいんだよお。
ほんと　かわいくねえなあ。ムーンな声の上官のほうがよっぽど可愛げがあるじゃねェか…」
「げぇ～～～。き、キモい……。あンたまさか両刀使いなの？」
「ああん？俺は別に新宿の○丁目なンざ通ってねえェぜ。
大体、何で俺が野郎とがっつかねぇといけねエンだ？お前　アタマ大丈夫か？」

「大丈夫……って、あンた　今シン・アスカがどうとか、レイ・ザ・バレルがどうとか、アークエンジェルの艦長がどうとか言ってたじゃないのお！」
「ハア？俺は今　エ○ァの話してンだぜえ。
ったくよお、これだから下腹部に脳味噌ついてる馬鹿は嫌いなンだ。
正しい性教育を受けねばならんのだッ!!」
じゅるりっ…
「あ、ちょっと……！
そこはチ○ッパチャップスしないでェ。
何で、何でそうなるの？ねェ、何でェ～～～」

「お前こそ何だよ、下の口も上の口も全然教育がなってねェじゃねェの。
お前のここ　ひく×２ぱく×２して、内申書に書かれちまいそうなくらいおばかさんだな。この赤服はコ○パ謹製かあ？ザフトってのは下半身がゲーム脳になってるエロゲーマーでもエースになれるのかあ？」
「うううっ…、あたし　光○の天使なゲームすらやったことないわよぉ」
「けっ、よくもそんな白々しい嘘を……。
もしそうなら、余計　教育に力を入れねばならぬではないか。
何だ？お前は性教育が足りないのか？それとも、辞書の淫語に紫の蛍光ペンでチェックを入れる程のドスケベなのか？…どっちなンだ？」
「……すいません。あたし　一度だけ『も○たん』に紫の蛍光ペンでチェックを入れました。
すいません、すいません、あたし　もうしません。天地神明に誓って、もうしません。だから、お願い、許して…」
「ほう、正直によく言った。だが、許すも許さないも、その単語次第だろう。……で、その単語とは？」
「ＧＲＯＩＮ（股間）……よ」

「……くくっ、こりゃかなりの再教育が必要だな。軍学校の先公の職務怠慢もここまでくると犯罪だ。公金の垂れ流しだ。
その点　偉いな、俺様は。こうして真面目に職務を遂行しているンだから。
どうだ？どこぞの尊師じゃねェが、そんな偉い俺の陰毛でも煎じて飲んでみるか？」
「い、いらないに決まってンじゃない。あンた　バカあ？」
「そうだよな、俺の陰毛１本５万ゼ○ーだもンな。お前がア○ム飛び込んでも買えないもンな。かわいそうに…。お前には唾液（＋お前汁）をただで分けてやろう。なに、金ならいらねェ」

「いや、くさい。ス○ス（く○ったしたい）よりくさいっ。
やだやだ、あたし　絶対に飲まない。「砂漠の虎」が淹れた特濃のザー汁なら飲めても、あンたの体液なンて、ずぅぇったいに飲まないンだからぁッ!!」



ぴしぃっ!!
「きゃあっ!?いた、痛いっ……」
「まったく、これだから飽食の時代の連中は困ンな。食の欧米化は否定しねェが、肉棒ばっか欲しがらねェで、ちゃんとバランスよく飲み喰いしろよ。後でた～～～ンと俺の白濁液、『ど○ちの料理ショー』で関○が絶賛していたアキバ産白濁液飲ませてやっからよお」
「ありえない……そンなお粗末なもの、絶対にありえないッ！あたしの喉に注ぎ込みたければ、そうしなさいよ。コーディネーターのアゴの力ならその粗末なものを三本でも四本でも噛み切れるンだからッ!!」
「強がるねェ、くくくっ…、本当に強がるよねェ。でも、あんまり強がってばかりいると損するよ。カニ頭の妹にアスラン取られちゃうよ。
まあ、小○原流フェラ道のブラックベルトホルダーで１○王者の俺にたっぷりとレディのあり方をシコまれた後には、アーサーすら相手にしてくれないような赤ブタになってるンだろうけどな」
「……ッ!?そんなっ…、そんな、あたしぃ……。
やだ、やだ絶対ッ！あたし　フレイ・アルスターみたいなオマ○コ娘になりたくない。あンな恥ずかしい生物には成り下がりたくない」
「なッ…!!お前　今　フレイをコケにした？
カテ公以来の大物をコケにした？」

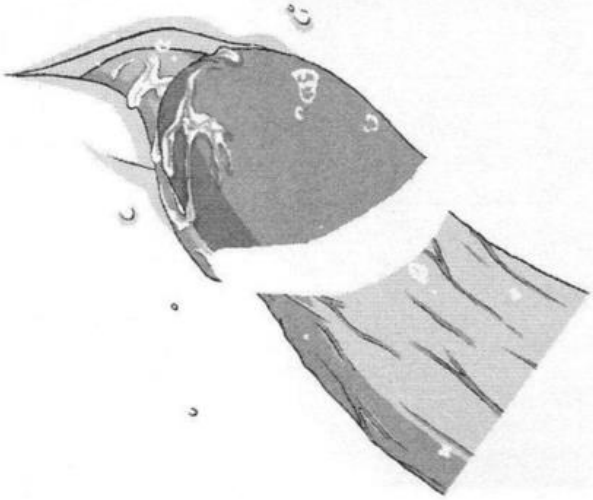
「なによッ、あンな脇のミリアリア・ハウと人気変わらないようなズベ公……。
あンた　まさかアレが好きだったの？
あンなイタイイタイ１５歳が好きだったの？」
「……」
「…へぇ、やっぱり駄目人間は駄目人間が好きなのねぇ。…けど、残念。あのアバズレならもう死ンじゃっていないわよ。
あ、でも、あンたが死ねばあの世で会えるかも…。どうせ、あンた達の逝くところなンて地獄以外ありえないものね」
「…偏差値低いだろ、お前。
俺にそンな口きくと、
地獄イクのはお前だ
ぜっっ!!」

ずごっく!!

「はうあ!!!」
「調子に乗ンなよ、赤ブタ…。
それ以上フレイ様をコケにしくさると、東欧の研究所に送って廃人にするぞ、ヴォケ」
「……そ、それだけは……」
「へへへっ…、びびったか？
東欧の研究所と聞いてびびったかあ？そうだよなあ、びびるよなあ。
でも、お前に注射器なンて勿体ねェ、お前にはこのイエローモンキーのお粗末な１３㎝で十分だ」
「うっ！……くさい。小○名物のスメルがするッ。やだぁ、しまって、そンな短小さっさとしまって」
「馬鹿メスブタ野郎！！
また殴られたいのかッ？」

「うっ、それはやめて…」
「…じゃあ、どうすれば
いいか分かるよな。
射撃が下手なくせに、いつもバズーカ撃ってる馬鹿でも、さすがに分かるよな。
自分が喉笛に撃たれるってこと位分かるよな」
「…え…えと、んと……（こいつマジだわ。あたしに尺八吹かせる気だわ。
そンなモノ吹きたくはないけど、吹かなかったら…）」
「おい、返事は？……返事をしないかッ」
「い、頂きます…」

ちろっ…、ちろちろっ
「ケッ、なンだソレは。
ウチの妹の亞〇亞や雛〇ならば
「かわいいオクチ使いね」とか言うところだが、成人のお前（プラントでは１５歳で成人らしい。『日〇キ〇ラクターズ！』に書いてあった）が、その口使いは無いだろう。キャラが違うだろう」



「あ、あたし　あンたのたぎる肉棒をちゃンとぉ……」
「これで？ちゃンと？」
「え、ええ。メイリンの愛読誌『少〇革命』の描写を９７％まで忠実に……」
「……やっぱ、お前　劣等生だな。の〇太以上、子ブ〇シュ以下だな。
大体、参考書からして論外だ。どれくらい論外かといえば、N〇SAWA論外が伍して戦えるくらい論外だ。ようはエースではないということだ」
「別に、こンなコトでエースにならなくても…」
「…ふう、やだねェ、やだやだ。最近の餓鬼の無気力無関心無感動ぶりには涙が出ちゃいそうだ。泣きゲー以外では表情が変わらない若いオタも悲惨だが、お前のその働く意欲の無さにも閉口させられるぜ」

「また、よく分からないことを……」
「分からないンじゃねェ、お前は分かろうとしてねェンだ。馬鹿!!
ったく、シ〇アザクみてェなツノが付いてるクセに、二等兵並にしか使えねェよな。お前のそのツノは飾りか？それとも、出ねェとは思うが同人ゲームで必殺技にでも使うのか？」
「ち、違うもん。ツノじゃないもん。これは私達を作りたもうた創造主・平〇サマがバランスをとるのに付けて下さった重力制御装置だもん」
「……そ、そうか。でも今、電波受信装置になっていなかったか…」
「そンなワケないでしょ。
ンもうッ！もっと深く吸うから、そンなモノ引っ張らないで。お願いッ」

「んだよ、その嫌がり方はよぉ。お前まさかココに性感帯があるとか言うンじゃねェだろうなあ」
「ば、ばば、ばかあ。そンなじゃないわ。…もう、ちゃンとやるから黙ってなさい」
ぬちゃっ、ちゅうぅぅぅ……

「うっ!?ううっ……」
「ほふ？ほンはへひへへはふふふンへほふ？（どう？こンなけ入れれば十分でしょう？）
「や、やればデキるじゃねェか…。さすがはエロ遺伝子を拡張したコーディネーターさまだな。お前　イ○グルスの４番狙える位は才能あるぜ。中学まで卓球やってた俺が保障する。
……なぁ、どうだ？渋くてウマイか？…ウマイか？」

「ふ、ふはひはへはひへほ、はは！（ウ、ウマイわけないでしょ、馬鹿！）」
「くけけけけ。そおか、ウマイか。田○サンがＣＭやってるお歳暮のハムよりウマイか。そおかそおか、じゃあ、タ～ンとお食べ」
「ほンは～、ほンはほほひははひはほぉ…（そンな～、こンなモノいらないわよぉ…）」
「そおか、嬉しいねェ。人がおいしそうに食べてくれる姿はいつ見てもイイもンだ。
…ルナたん、安心をし。コイツならちゃ～ンと下の口の分のオカワリも用意してっから。下は下で、石○シェフばりのホワイトソースで食わせてやっから」
「ほ、はへはひ、ほはンほひはへはぁ…（お、お願い、オ○ンコにだけはぁ…）」
「オ○ンコにだけは欲しいか。そおかそおか」
「ひはふッ!!ほはンほひはへははへへぇ（違うッ!!オ○ンコにだけはやめてぇ）」
「じゃあ、菊の紋所か？欲しいのか？」
「…ふ、ふひはへふ（…す、すいません）」

ちゅうちゅうちゅっ、ちゅぱ
ちゅぱ、ちゅうぅぅ、ぴちゃ、
ちゅぱちゅぱ……
「…うッ !! 来た来た来た。
ルナたんお待ちかね～、ユー
の白○恋人が来なすったぜぇ。
ってなわけで、せいぜいよ～
く、味わっとけ☆」
「へ？へ？はひはひ？ひほひほ
ひひほ？ほふはは？ひふほほ？
（へ？へ？なになに？白○恋人
？ヨ○様？新○？）」
「ば～～～か。ザー汁様以外あ
りえねェだろーが」
どっくん、どっくん、どっくん。
ぴゅっ、ぴゅっ、ぴゅっ !!!
「うぐぅ !?」
どっくん、どっくん、どっくん
ぴゅっ、ぴゅっ、ぴゅっ !!!
「はー、はー、はー、……酷い。
酷いわよ、こンなぁ……」
「酷い…だと？酷いのはお前のほ
うではないか」
「ハア？何であたしが……。あた
しは被害者よ。何も酷くないわ」

「…いや、酷いだろ。こンなにもお残しして…。
ちゃあンと飲み干さねェと、農家の人や、ス○
ジランドの子供たちに申しわけがたたねェぜ。
お前　先進国民の恥だぞ。河○監督の『ア○ジ
ュナ』でも見て、せいぜい悔い改めることだ」
「悔い改めろって言っても、別に、こンな臭い
もの誰も欲しがらないわよ、ばか」
「ふっ。ばかなのはお前だ。
１週間後、お前はこの白濁液を欲しがるよう
になる。三度の飯より、イカ汁味のう○い棒
が欲しくなる。そう決まっている」
「……ありえない」
「いや、ありえるのだよ。陵辱系の調教ゲーを
月平均３本こなすこの俺様が言っているのだ。
野○総研よりも、M○GIよりも信用に足る未
来予測じゃないか」
「……認めない、そンなの」
「くくっ…イイねェ。従順なハ○公になるヤツ
ほど、イキがるもンだ。お前　素質に満ち溢れ
てるぜ、もちろん俺様専用肉便器としてのな」
「に、にく !?にくべんき…って、あンた……」

くく～～～ん
「う～～～ん、臭い。流石は戦闘員、ムレて臭いオペレーターも素敵だが、健康的な汗、特に１０代の健康的な汗は最高だ。じきにこの匂いがザー汁の匂いに取って代わると思と、残念で仕方が無いねェ」
「……誰がイカ臭くなンて…。あたしならないわ、絶対に」
「はい × 2、分かったから、オマ○ンコする準備をしましょうね～。チミには何も聞いてませ～ん。上の口はお呼びでありませ～ん。用があンのは下の口で～す」
ぴちょぴちょぴちょ…
「やるの…？ほ、本当にやっちゃうンだ？……やっちゃうンだ…」
「けけっ、怖気づいたか？もうすぐ産気づくのに、怖気づいてる暇なンてないぜ。ここからはカ○ムーチョのババアよろしくヒーヒーいうのが、お前の仕事だ。そンで、貴様の料理漫画みてェな肉汁垂らしてるマ○コにブチ込むのが、俺様の仕事だ。無論、俺には危険手当（＋時給２００ギ○）が付く。公務員様々だな」
「善良な市民の血税で、あたしの純潔が…。世の中って一体…」
「残念だったな。これがオトナ社会だ」

ずぶぶぶッ!!!
「あ い た」
「くはぁ、御開通おめでとう。オトナの世界にこんにちは♪」
「お、墜とし…墜として……やるぅ。あンたなンかあたしのザク…ザクで撃ち殺してェ…やるぅ……」
「墜とす？俺を？惨めな芋虫が？冗談はよせよ。痴漢で手錠没収されたイケメン教授より説得力ないぜ」
「いい…もん。あンたなンて、あンたなンてェ……」
「この後に及んで、まだ減らず口か。まったく…、お前アタマ悪いよな。Lv. 1のス○リンより悪いよな」
「悪くない…。別にあたし勉強デキなくない。メイリンよりも、シンよりも、もちろん代○二出のあンたよりいいもん」
「赤ブタのくせに人様を馬鹿にしやがって…。俺だって代○二入る前はC○MP学園だぜ。エリートだぜっ！」
「そンなあ、そンなことって…」
「認めたくない……か？ジブリール様と同じガッコのマン研入ってたのを認めたくないか？」
「……あンたのことなンてどうでもいいわよ。そンなことより、このお粗末なモノの存在を認めたくない。ずぇったいに認めたくないッ!!」
「くくっ、そうか？デキたら認知してやるぜ、俺は」

「サイテーかよ…。
お前も人気薄な妹も
そンなサイテーな行
為の賜物じゃねェの。
おふくろさん悲しま
せるようなコト言っ
ちゃあいけねぇなあ、
女になったルナたん。
……オラ、お仕置きだ！」
ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ
「いた！いた！いた！
痛ひっ、やだ、やあよ、痛い。
動かないでェ。あああッ!!」
「かっかっかっ…。
動かねェプレイ
なンざあり
えねェだ
ろーが。
アタマちゃ
んと動い
てっかあ？
お前」
「に、認知ってッ…!?
あンた　まさか……」
「おうよ。黄色くて、短足で、おた
くで、ロリコンなジャップの餓鬼
を孕ませる気マン × 2だぜえ」
「や、やだ。サイテー。サ
イテーよ、そンなの…」
「う、うう、動いてるわよ。
あたしだってザフト軍人の
端くれ…こンなモノで、こ
ンなモノくらいでェ～～」
「…なンだよ。こンなモノ
とか言いながら、ノ○イラ
のようにキツキツに絞め上
げおって……。
こンなに絞めておいて、処
女だからって言い訳は通用
しないぜ。○作さん三兄弟
の妹だと思われても仕方な
いぜ？」

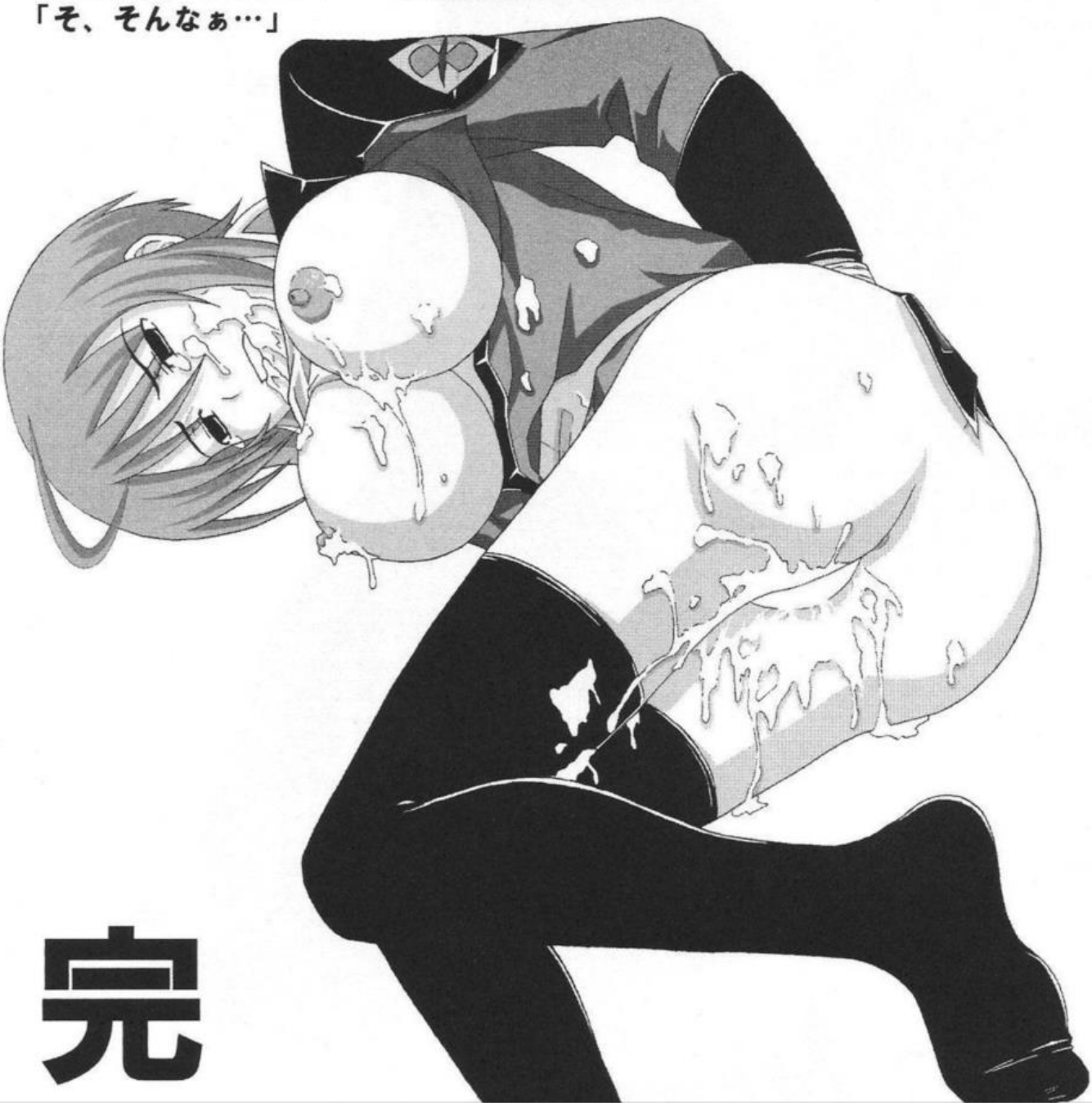
ぴちょっ、ぴちゃっ、ぴちゅっ
「ふああ……んぐ…」
「…ったく、お前　マン汁垂らし過ぎだぞ。
青山のカリスマ美容師がセットした俺の
ライオンヘアーが台無しじゃねェか。
ほれ、処理しろ、飲め飲め」
ぴちょっ、ぴちゃっ、ぴちゅっ
「ふへはっ……ぷはあッ!!」
「あ～～～、だらしねェ～。
自分のお汁くらい自分で処理しろよ。
お前のモサモサした恥毛で俺の御子息を
ＶＩＰ専用看護婦付き病棟送りにする気か？
嬲って頂く殿方に申し訳なくないか？」
「…別に嬲って貰わなくたって……」
「アホ。そういう設定になって
ンだ。いい加減諦めろや」
ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ
「んぐっ……あふん、かはっ！……くぅん…」
「はあはあ…、しかし締まりのほうは優等生だな。やっぱコーディネーターの……
それも、処女で赤服のオマ○コは違うぜ。俺様のようにベ○ダンディーが降臨す
るくらい日頃の行いがよくねェと味わえねェよ、こりゃあ」
「うう…うは、うううう……あン…」
「…ほう、嬉しいか。そうか、そうだよな。お前　ガ○マ並にしか使えねェもンな。
褒められると嬉しいよな。誰も褒めてくれないからな」
「うれ…嬉しいわけ……あンたに褒め……はうあッ」
「そンなエロゲー声優みてェな声出して、嬉しくないわけ
ねぇ～だろ～が」

「あうううう…（やだ、あたし
嬉しくないけど、善がって
る。こンなヤツの７５㎜
対空自動バルカンに善
がり始めてる…）」
「……!?どうした？」
「えッ!?べ、別に…」
「……くくっ、そうか、…そうか。
流石だな、コーディネーターの
適応能力はよぉ。
…いいぜ、イカせてやるぜ…」

「おらぁ!!!」
ぱあんッ!!!!!!
「あ、あひいッ!!
…だッ、やだやだ、
…っちゃう…くッ!
あああ〜〜〜……」
どっくん、どっくん
どっくん……
ぴちゃ、ちゅっ、
ぴゅぴゅっ、ぴゅっ
「ううう……たない。
こン…も……っぱい。
赤服…白服に…て、昇
進…った」

・
・
・

「うい～～～、よく出したよく出した。ＳＥＥＤ系お得意の、攻撃シーンの使い回し並によく出した。
……どうだね、ルナたん。これだけ一杯出してもらった感想は？」
「……死○星が…一際赤く輝く死○星が……」
「う～～～ん、何口走ってンだろうね、このブタは…」
「あうう……、練炭…、七輪…」
「…はぁ、こりゃ重症だ。たった一回でコレじゃあ、完全調教ＥＮＤはすぐそこじゃねェか…。まあ、シモのほうが使えるだけ、まだマシだけどよ」
「あ……ああ…（…汚されちゃった。汚されちゃったわ。それも名も無きサンピンに……ＪＡＰで、ＨＥＮＴＡＩで、ＯＴＡＫＵな早漏野郎にぃ……）」
「…ふう。中○先生が褒めてくださるくらい、「いい仕事」したぜ。帰って、どろり濃厚なヤ○ダヨーグルトでも飲みながら、夕方アニメでも見るか……」
「……あ、あたしは…あたしはどう……？」
「ハア？放置だよ放置、放置プレイだ。誰か来たら、白濁液でも飲ませて貰え。じゃあな。ってわけで……任務完了」
「そ、そんなぁ…」



完

①ルナ触覚
…「引っ張りたい」という欲求に駆らせるセックスシンボル。ルナマリアがエロいキャラであるという証明でもある。

②ルナ脳味噌
…エリートでありなら、お手軽感しか感じさせない可哀想な脳味噌。エロい思考が働かないあたりがとてもエロい。

③ルナ腕
…射撃が下手なのに甲板での射撃ばかりさせられ、腐る一方の赤服の腕。

④ルナおっぱい
…妹以上艦長以下のおっぱい。女の「性」を抑圧する軍服の下からその存在を主張するおっぱいは、まさにエロス銀座。Dくらい？

⑤ルナ腰
…無駄の無いスケベな腰。でも、一度も振ったことがない寂しい腰。たぶんアスランには一生使ってもらえない。

⑥ルナミニスカ
…女っぽさより、安っぽさを感じさせる女性パイロット最後の砦。
…ちょろくて可愛い。

⑦ルナニーソ
…黒ニーソこそ平井氏最大の「功績」。ルナマリアスキーの約3割は、コレにやられたのではないかと…。

☆あとがき☆

おはようございます。こんにちわ。私、名児屋、初の陵辱系本&オフセ本であります。でも、全然、エロくないですね、これ。なんていうか、意味が分からない、いや、電波入ってってるんじゃないかって感じです。

さて、この本の登場人物に関してですが、表紙と異なりメイリンは出てきません。メイリンを期待して買われた方には申し訳ない気持ちで一杯です。でも、載せようがなかったんです。すいませんでした。

それにしても、最近、同人ショップでルナマリア本をよく見かけます。人気……上がってるんでしょうか？男性向け同人界におけるジャンルとしての種デスというのは、サ○ン鳥栖ばりの（失礼！）弱小ジャンルのような気がするのですが…どうなんでしょう。

☆次回の予定☆

今のところ有力なのは、『天使のいない１２月』か、『ネギま！』か、『紳士同盟クロス』です。はっきり言って、ちょおマイナージャンルです。『ネギま！』は確かに流行ジャンルなんですが、描いてる人が意外と少ないので、「みなしマイナー」って感じです（あれだけキャラが多いと、人気が割れて描きにくいのかもしれません）。

一応、これら３つを挙げたのは」「イタいエロ百合」本を作りたいからです。あの『百合姉妹』が休刊して以来、私の中の百合への情熱がこおこおとマグマのように燃え盛ったまま…。このままでは燃え尽きて氏にそうなので、「かあああ」となるものが描きたく、決めました。

もちろん ×(かける)のは、「恵美梨 × 雪緒」、「木乃香 × 刹那」、「潮 × 灰音」ってとこです。

ただ、合同で本を出す場合、また種デスかもしれません。個人誌以外は全くどうなるのか分からないので、何とも言えないのです…。

☆サークルに関して☆

現在は、個人サークル「名児屋」で活動していますが、今後、名古屋では「ぷち☆ミント」さんのところに厄介になるかと思います。最新の活動などは「ぷち☆ミント」さんのＨＰに随時更新されるかと思いますので、そちらをご覧ください(現在、一時閉鎖中ですが)。

ただ、東京や(ひょっとして)大阪などへ遠征する場合は、個人サークル名義「名児屋」で参加することもあると思います。煩わしいと思われるかもしれませんが、ご理解くださると幸いです。

☆近況☆

２年前くらいに壊れたＰＳ２をそろそろ直してもらおうかと思います。まあ、ＰＣのゲームをこなすのに一杯一杯で、直したところで使わないということが、なんとなく想像できますが…。

表紙のほうはあたしとお姉ちゃんあたりなのに中身のほうはお姉ちゃんばっか

それで何？あンた犯されてまで出たかったの？

出たかった・・・ア○ルにテ○ドン突っ込まれてでも出たかった!!

メイリン
あンた　そこまで―
――――――・・・

・・・だから殺るのあたしが次の主役(オナペット)になるためにセ○バー以上の同人界のアイドルになるためにっ

セ○バー？セイバーガンダム？

ぶすっ

あう

あらあら～それは無理ですわ人気薄な妹サン

だって 次は 種デス本じゃあ ないンですもの

ちらっ

な なンで すってェ!?

うず

うず

うず

じゃあ次は… 次は一体?

フ○イト? ひ○ぐし? それとも……

作者が気分屋だから 保障はしかねるけど 予定でいいなら 教えてア・ゲ・ル♥

次は… ○○○○○○○○○の エロ百合本ですわ

マ○みて ではなくってよ

そ それって 黒歴史にされた イタイゲームじゃ…

なンで今頃…

次回予告 完

発行日　２００５年５月２９日

発行　　名児屋

禁・無断転載、複製、複写、アップロード

名児屋